

幼稚園・保育園による「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」

合同発表会

- プ ロ グ ラ ム -

開会あいさつ

墨田区長 山本 亨

墨田区子ども・子育て会議乳幼児ワーキンググループ専門部会会長

長田 朋久 氏（横川さくら保育園園長）

プロジェクトの趣旨説明

玉川大学教育学部教授 大豆生田 啓友 氏

（墨田区子ども・子育て会議会長）

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

第 1 部 18:15~19:15

取組報告

【発表園】

花園保育園、緑幼稚園、光の園保育学校、あづま幼稚園

第 2 部 19:15~19:50

パネルディスカッション

【コーディネーター】

大豆生田 啓友 氏

【パネリスト】

松山 洋平 氏（和泉短期大学児童福祉学科准教授）

岩田 恵子 氏（玉川大学教育学部教授）

高嶋 景子 氏（田園調布学園大学子ども未来学部准教授）

三谷 大紀 氏（関東学院大学教育学部専任講師）

まとめ

大豆生田 啓友 氏

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

閉会あいさつ

墨田区子ども・子育て支援担当部長 石井 秀和

「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」

～平成27年度の実践報告～

1. プロジェクトの趣旨と目的

新制度では、保育の量の確保と同時に、その質の向上についても大きな目的の一つとして位置づけられている。そこで、墨田区においては、その乳幼児期の教育・保育の質の向上を図っていくため、近年、欠かせない視点の一つとして提唱されている「協同的な学び」に着目し、継続的な実践の取組みと研究を通して、保育実践の質の向上を図っていくことを目的として本プロジェクトが立ち上がった。

国立教育政策研究所教育課程センターがまとめた『幼児期から児童期への教育』⁽¹⁾等でも指摘されているように、幼児期後半になり、子ども同士の間関係が深まり、互いに学び合い、大きな目標に向けて共に協力していくことが可能となる時期において、子どもたちが共通のイメージや目的を形成しながら、話し合い、考え合う、協同するプロセスを通して生まれる学び（「協同的な学び」）は、小学校における教科などの学習にも引き継がれる重要な基盤となる。また、それは、保育者主導の与えられたテーマや活動としてではなく、子どもたちの興味・関心や遊びの延長線上に生まれる「子ども主体」の活動として展開されていくことにより、子どもたちが、小学校以上においても（さらには、その先の人生を通じて）自ら「学びに向かう力を育てる」ことへ繋がっていくものと考えられる。

さらに、本プロジェクトでは、公立・私立、幼稚園・保育園という枠組みを超え、墨田区の全ての子どもたちへの教育・保育を共に考え、その質の向上を目指していくために、各発表園を選定し、子どもたちが主体的に遊びや生活を展開している日常の保育の中で、子ども自身の興味・関心から発展していく「協同的な学び」が、どのように生み出され、どのように深まっていくのか、さらには、そこでの子どもたちの学びの深まりや広がりを支える保育実践について検討・共有していく。それにより、墨田区全体の乳幼児期の教育・保育の質の向上に繋げていくことを目的としている。

(1) 国立教育政策研究所教育課程センター『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに、2005年

2. 平成 27 年度の主な実施報告

(1) 発表園における実践および公開保育、プロジェクト発表会

各発表園における実践の取組み

各発表園の年長クラスにおいて、日常の保育の中で「子ども主体の協同的な学び」の深まりをねらいとした実践を展開し、それらの経験を通しての子どもたちの学びや育ちについて考察していく。

(各発表園には、保育実践を観察し、その都度カンファレンスを行いながら、その時々々の活動状況や課題を園と共有し、助言を行うプロジェクトの同伴者としてのアドバイザーが配置された。)

各発表園における公開保育

各発表園において公開保育を行い、それぞれの発表園同士が参加し合い、互いの実践を共有する。また墨田区内の幼稚園・保育所関係者や子ども・子育て会議の委員等も参加し、子ども主体の保育の展開とその実践を通しての子どもたちの活動を共有する。公開保育後には、振り返りと意見交換を行う協議会を行い、それらの実践を通しての子どもたちの学びや育ちについて理解を深め、自園の保育の振り返りに繋げていく。

プロジェクト発表会

全発表園の公開保育終了後の年度末に、墨田区内外の保育関係者や保護者、地域の方たちに向け、4園合同でプロジェクト発表会を実施する。各園の実践事例についての報告を行うと同時に、それぞれの実践の持つ意義や成果についてコーディネーター(大豆生田啓友氏)およびパネリスト(各園アドバイザー)によるパネルディスカッションを行う。

(2) 発表園(計4園)および担当アドバイザー

- ・公立幼稚園...緑幼稚園 (アドバイザー: 玉川大学 岩田恵子)
- ・公立保育園...花園保育園 (アドバイザー: 和泉短期大学 松山洋平)
- ・私立幼稚園...あづま幼稚園 (アドバイザー: 関東学院大学 三谷大紀)
あづま幼稚園においては、年長クラスではなく、年中クラスを対象とする。
- ・私立保育園...光の園保育学校 (アドバイザー: 田園調布学園大学 高嶋景子)

(3) プロジェクトの遂行スケジュール

- 4月 ... 発表園の選定と各園における今後の進め方の検討
各発表園の園長および担任保育者に向け、大豆生田先生より「子ども主体の協同的な学び」に関する説明会実施
- 5月~ ... 各発表園における実践の取組み開始
+ アドバイザーによる保育観察・カンファレンス(各園年間3回程度)
- 10~1月 ... 各発表園における公開保育と協議会
- 2月 ... 4園合同によるプロジェクト発表会

この他に、各園が互いの進捗状況を共有しながら進めていくために、子ども・子育て会議乳幼児ワーキンググループ専門委員会開催時に、4園の園長および担任保育者も参加し、その時々々の実践の状況や課題等について、随時報告し、共有を図ってきた。

3. 各発表園における実施概要

発表園	緑幼稚園 (公立幼稚園)	花園保育園 (公立保育園)	あづま幼稚園 (私立幼稚園)	光の園保育学校 (私立保育園)
アドバイザー	玉川大学 岩田恵子	和泉短期大学 松山洋平	関東学院大学 三谷大紀	田園調布学園大学 高嶋景子
プロジェクト 参加クラス・ 担当保育者	5歳児クラス (すみれ組) 片山彩乃	5歳児クラス (つくし組) 齊藤明美 杉本智子 小林良子	4歳児クラス (うめ組) 弦巻夏美 東海林大輔	5歳児クラス (ゆり組) 鵜野加納子 高橋杏奈
アドバイザー との初回打合 わせ	5月12日(火) 10:30~	5月12日(火) 15:00~	5月21日(木) 15:30~	5月13日(水) 9:00~
アドバイザー 参加の保育観 察・園内研修	5月12日(火) 10月6日(火) 11月5日(木)	6月25日(木) 9月17日(木) 10月29日(木)	6月19日(金) 10月15日(木) 11月12日(木) 12月8日(木) 1月21日(木) 午後のみ	7月15日(水) 11月4日(水) 1月6日(水) 午後のみ 1月13日(水)
公開保育	平成27年 11月10日(火)	平成27年 11月6日(金)	平成28年 1月28日(木)	平成28年 1月20日(水)
公開保育参加 者数	27名	12名	29名	28名

墨田区立 花園保育園 つくし組 (5歳児クラス)

～一人の発見をみんなのものへ～

はじめに

花園保育園は1歳児から就学前までの119名のお子さんをお預かりしています。近くには江戸時代から続く向島百花園があり、子どもたちは四季折々の草花に触れることができます。また、保育園の周りは開園当初から住んでいる方が多く、温かいまなざしで子どもたちを見守ってくださり、下町ならではの雰囲気が残っている地域です。

<定数>

	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
定数	20名	24名	25名	25名	25名	119名

園目標

心身ともに健康な子ども

自分で考え行動できる子ども

みんなで一緒に遊べる子ども

事例

おたまじゃくしがやってきた！！

4月中旬、H君が持ってきた“おたまじゃくし”に子どもたちは夢中になった。

おたまじゃくしを育てたい！

まずは観察しよう！

どうやって育てるのが、みんなで考えよう！

おたまじゃくし研究会発足！

真剣にオタマジャクシの観察をする自分たちの姿に、

R君「なんだか、研究所みたいだね」T君「じゃあ、これはおたまじゃくし研究会だね！」

保育士「じゃあ、研究員のバッチを作ろう！」

S君「バッチはおたまじゃくしの形にしたほうがいい」

T君「研究会だから、名前は漢字で書きたい」

Y君「僕は研究会の部長になりたい」Hちゃん「私は案内係り」

研究会の響きに、子どもたちの気持ちは一気に盛り上がった。

調査開始

Aちゃん「わからないことは、園長先生に聞いてみよう」

C君「食べ物のことなら、先生（栄養士）」

Rちゃん「よし、事務所に聞きに行こう！！」

名刺を作ろう！

「会社の人は、“こういうものですが”って、カードみたいのを渡すよね！」と発案があり、名刺をイメージし、漢字で役職と名前を書き込んだ。

それまで興味を示さなかった子もバッチや名刺など目に見えるアイテムの存在に、「やってみたい」とメンバーに加わり、研究会がクラスの中に広がっていった。また、アイテムで研究員になりきることで、飼育とはまた違う楽しみを感じている子ども達。

研究員が増えると、「お給料を払わなくては」と給料作りに夢中になる子もいて、さらに活動が広がっていった。

担任同士で確認し合ったこと

子どもたちからの小さなつぶやきにも耳を傾け思いを実現できるよう援助していく。

(保育士が活動の主導をとらない。)

一人ひとりの声を、クラス全体に広げていく。

子どもと同じ目線に立ち、おたまじゃくしの飼育を一緒に楽しむ。

保護者や他クラスにも積極的に発信し、子どもの“たのしい”に寄り添っていく。

おたまじゃくし研究会の活動内容

おたまじゃくしの観察 水槽の掃除

おたまじゃくしについての研究

餌の調達

虫を捕まえる装置の設計図作成

名刺作り バッチ作り 係り分担

給料計算 お金作成

保育者の援助

- ・おたまじゃくしを見やすい場所に置く
- ・絵本、図鑑、ノート、筆記用具の設定
- ・話し合いの時間確保

おたまじゃくしがカエルになったら・・・？

子どもの思い・・・「どうしてもおたまじゃくしを手放したくない」「何としてでも、虫を捕まえて、カエルを飼いたい」「うまく、虫を捕まえることができたなら、カエルになっても飼えるかもしれない！」・・・、子どもたちは虫を捕まえるための装置の設計図を描き、休日も虫探しに没頭する姿が見られた。

また、会おうね！元気でね！

やっと、捕まえてきたダンゴ虫とアリに、小さなカエルは見向きもせず、子どもたちは、カエルを飼うことはできないと結論を出した。そして、「どこに逃がしたら、安全か」「場所は東白ひげ公園！」「池はいいけど、カラスがいっぱいだから危険だ。」「ここは人が通るから踏まれちゃう」「雨が降ったら水がたまりそうなところがいい」と考えた末、広場の大きな木の根元にカエルを逃がした。

情報の共有・保育の可視化

- ・一人ひとりの研究や発見を、クラスの中で発表する機会を、保育士が大切にしていた。
- ・つくしんぼ新聞（壁新聞）の貼り出し（活動の様子を保護者・子ども・職員に発信）
- ・つくしんぼ新聞を子どもが見やすい場所に貼り出し、自分たちの活動を振り返ることができるように工夫。
- ・つくしんぼ便り（クラス便り）の発行（活動の内容を保護者に発信）

子どもの思いや疑問に保護者が寄り添い、一緒に楽しみ、知恵を貸してくれる姿の拡大。

えさや、飼育の方法についての情報の多くは、保護者から寄せられたもの。

他クラスも興味をもって5歳児の活動に参加 子ども達の意欲の向上

考察

『子ども主体の協同的学び』とは、今までも公立保育園の日常保育の中で、当たり前になり広げられてきた内容である。

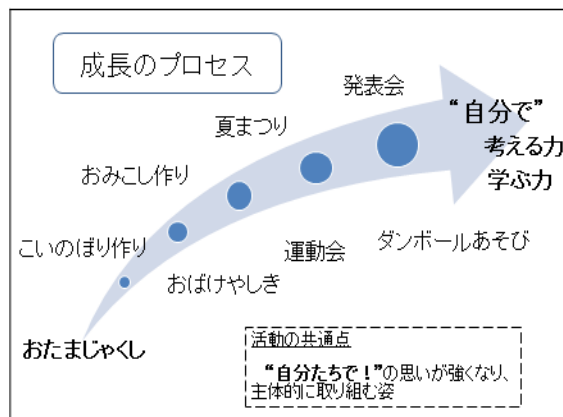
子どもたちは、「自分自身の興味関心」「探究心から学ぶ力」「友だちとのかかわりを通して響き合い、育ちあっていく力」をもっていることを改めて感じている。そして、子どものストーリーをしっかりと実現していくよう支援していくこと、そのストーリーを、クラス全体、園全体、保護者へと広げていくことが保育士の大きな役割であることをあらためて実感している。

また、子どもが遊びの中で発揮する力を記録として残し発信したことで、保護者に保育に興味をもって頂けるようになり、親子の対話が増え、子ども自身も自分たちの活動を振りかえることができた。

子どもたち、そして保護者と一緒に保育が楽しめるということは、私たち保育者にとって、とても幸せなことだと思う。この経験をふまえ、その後の保育においても、遊びだけでなく行事の取り組みでも「子ども主体」「協同的な学び」を大切に保育を展開してきたことで、子どもたちの“自分たちで”の思いが膨らみ、何事にも主体的に取り組もうとする姿が増えてきている。

おわり

『子ども主体の協同的な学び』プロジェクトに取り組むにあたり、職場の理解と協力があったこと、そして、アドバイザーの松山先生に心より感謝いたします。



子ども主体の協同的な学びプロジェクト

平成28年2月29日
墨田区立緑幼稚園

1. 所在地

東京都墨田区緑2丁目11番5号

JR総武線「両国」下車、徒歩13分 都営地下鉄大江戸線「両国」下車、徒歩10分

2. 教育目標

人権尊重の精神を基盤とし、様々な人とのかかわりを重視し、豊かな体験を積み上げながら、生涯を通して、感性、知性、道徳心や体力を育み、社会に貢献できる人権感覚を身に付けた幼児の育成を目指して、次の目標を設定する。

- みずから考えて行動する子ども
- どんなこともがんばる子ども
- りかいし合うあたたかい子ども

3. 学級編成

2年保育4歳児	ゆり組	34名
2年保育5歳児	すみれ組	33名
合計		67名

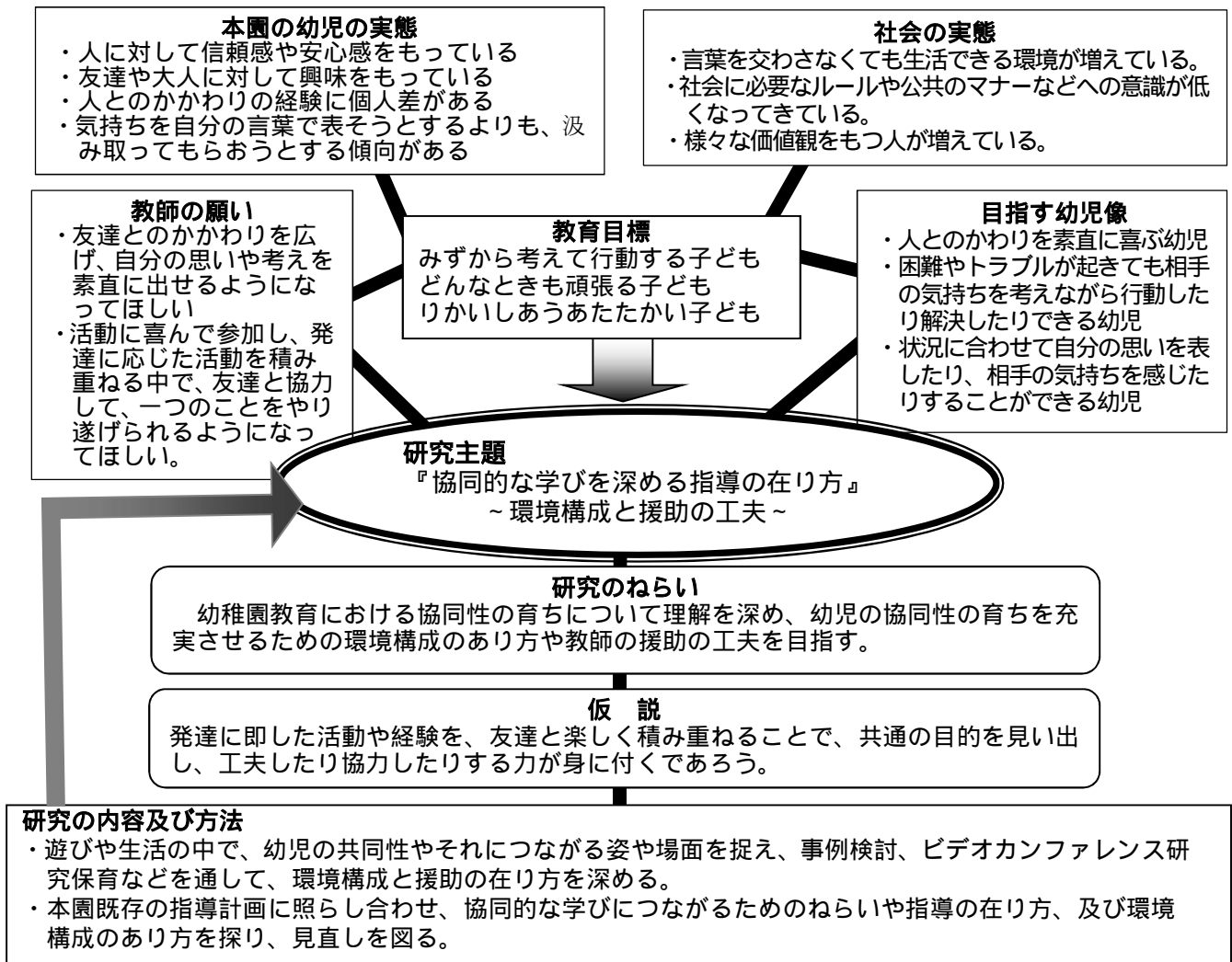
平成28年2月現在

4. 主な行事

前期	入園式 遠足 健康診断 保育参観 親子遠足 日曜参観 プラネタリウム見学 親子七夕会 1年生、5年生との交流 プール 区一斉防災 遠足 コスモス会 お月見会
後期	運動会 おにぎりパーティ 緑フェスティバル やきいも会 遠足 子ども会 もちつき会 お正月遊びの会 豆まき 生活発表会 ひな祭り 1年生と交流 お別れ遠足 お別れ会
毎月	避難訓練 安全指導 測定 誕生会

5. 研究の概要

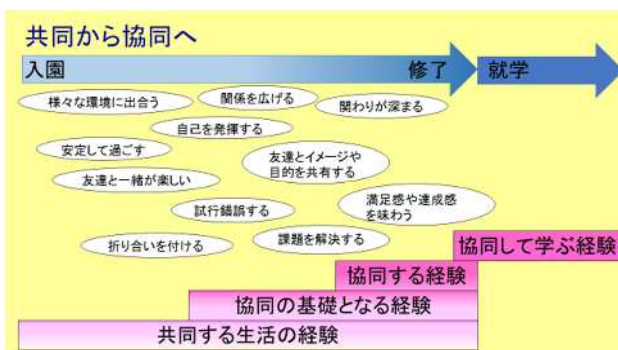
(1) 研究構想図



(2) 「協同」とは

私たちが考える「協同」とは、人とのつながりの中で、幼児が自己を十分に発揮して遊びや生活に取り組む中で、互いに認め合いながら一人一人のよさが生かされる関係性を築いていけることと定義した。

(3) 共同から協同へ



幼児は入園し、初めての集団生活の中で、様々な環境と出会い、教師との信頼関係を基盤としながら、安心して過ごせるようになる。幼児期にふさわしい生活を通して、少しずつ自己を発揮するようになり、人間関係を広げていく。こうした関係の中で、幼児が互いにかかわりを深めて、一つの目的を共有し、折り合いを付けたり、試行錯誤したり、課題を解決したりしながら、協同の活動ができるようになる。そのような経験が、小学校以降の教育の基礎となると考える。

(4) 実践事例 ~年長5歳児11月 緑フェスティバル(遊園地ごっこ)に向けての取り組み~

メリーゴーランドグループ(9名)は、本物らしさにこだわり、設計図作りに一週間かけた。

幼児は、教師が意図的に本棚に揃えておいた図鑑や絵本を見つけ、丁寧に描き始める。絵を描くことに自信がない幼児は、友達が描きやすいように、図鑑を立ててもっていたり、色を塗ったりしながら協力して一つの絵を完成させる。「パンダはフワフワであったかい感じ」「ペンギンはツルツル」など、自分イメージを言葉に出したり、友達の考えを認めたりする姿が見られる。

製作活動では、設計図をもとに「顔はどこに付ける?」「これなら二人乗っても大丈夫だね」「目はこの辺りかな」など、互いに思いや考えを出し合いながら、グループの友達と協力して進める。より本物らしくするために、乗り心地にもこだわり、素材の感触を実際に触って確かめたりしながら、イメージに一番合っているものを選ぶ。

当日は、案内係や受付、運転手など、役割分担をして、係を交代しながら、最後までお客さんを楽しませた。



(5) まとめと今後の課題

- ・教師が幼児の思いやイメージをくみ取り、それを実現できる場や環境、材料などをさりげなく用意したりすることが大切である。
- ・子どもたちから出てくるアイデアをどう教師が受け止め、無理矢理一つにするのではなく、それぞれの意見を生かしながら、その子が何を言いたいのかをつなげていくことで、協同的な姿につながる。
- ・日ごろから、友達を受け止め合える、雰囲気のある学級作りに努める。発達に心じて、教師が意図的・計画的に活動を取り入れ、安心して自己を発揮できる環境の中で、様々な感情体験ができるように援助していく。
- ・4歳児は互いに見合える保育室での遊びの充実に努め、どのように他の遊びに気付かせていくかが教師の援助のポイントである。5歳児は、遊びの振り返りをする中で、次につながっていく。幼児同士で遊びを共有できるきっかけを教師が作り、イメージをつなげていくことが大切である。
- ・日々の活動風景を幼児の目に入るように視覚的に掲示しておくことで、次の遊びの手がかりになったり、続きが生まれやすくなったりしていく。また、保護者にも、子どもが経験していることや過程を伝えることができ、成長を共に喜び合うきっかけにもなる。
- ・遊びを深めることが、学びの深まりにつながっていることがよくわかった。行事ありきではなく、そこ至るまでの過程の幼児の育ちを大切にしていきたい。引き続き、遊びを充実させる環境構成や援助の在り方を探り、協同的な学びの深まりにつながるように努めていきたい。

保育園概要

社会福祉法人 雲柱社 光の園保育学校

光の園保育学校は1923年の関東大震災の時に、創設者賀川豊彦が仲間と共に展開した被災者救援活動の中から生まれ、1928年に地域の人々の要望に答える形で保育事業がはじまりました。常に時代の先駆けとしてこの地に奉仕してきた雲柱社の中でも最も古い87年の歴史がある保育園です。

社会の変化に対応し、2001年には外手小学校に0歳児専用の分園を開始。2012年と2013年には墨田区の待機児解消の要請を受けて、小規模保育事業「ぶどうの木保育室」「八広ぶどうの木保育室」を実施してきました。子どもの最善の利益を考え、地域社会と時代のニーズを見据えて、賀川豊彦の「精神と実践」を継承しています。

保育方針

「キリストの愛により共に育ちあう」

光の園保育学校では、キリスト精神に基づいて保育をしています。

子ども達の保育を通して、子ども達だけでなく親も家庭も、職員も、そして地域もキリストの愛によって共に育つことをめざしています。

めざす子どもの姿

「神と人から愛されていることを知り、自分や周りの人を大切にする子ども」

1. ありのままの自分が受け入れられ、自己発揮でき、考えて行動する子ども
2. のびのびとしなやかに、身体を動かして遊ぶ子ども
3. 基本的な生活習慣が身につく、見通しをもってできることを自分でする子ども
4. さまざまな人との関わりを大切にし、思いやりを持って共に生きる子ども
5. 自然や命あるのものとの出会いを大切にし、豊かに感じ取り表現する子ども

保育定員

クラス	0歳 (分園) つぼみ	1歳 もも すみれ	2歳 たんぽぽ すみれ	3歳 ちゅうりっ ぷ	4歳 ばら	5歳 ゆり	合計
在籍数 (人)	6 12	12 12	12 12	28	28	28	150

水族館ごっこの取り組みの経過

「君が「クラゲのモビールを懐中電灯で照らしたい」と言ってもってくる。
 (すみだ水族館のワークショップで作ったもの)
 女兒が翌日懐中電灯を持ってきたため、集まりで実際に照らしてみた
 「きれいだね～。水族館みたい！」みんなで感動を共有した (9月)

1年間で大切にしてきたこと

- ・「見守る」を徹底する。
- ・「やってみたい」を援助する。
- ・子ども主体を尊重する。
- ・子ども同士を繋げる

改めて気づいたこと

- 子どもにとって大切なこと
 愛されている実感を持つ 自己発揮
- 保育者にとって大切なこと
- ・信頼関係を築く
 - 子ども・保育者同士・保護者
 - ・新しいことにチャレンジする。

ゆり組で水族館をつくらう！（ほかのクラスをお客さんとして呼びたい）
 どのような水族館にするかを話し合い、保育者がホワイトボードに書き留めていく

一斉に水族館づくりがスタート 2～4人の小集団に分かれ クラゲのトンネル、
 年間パスポート、お土産、魚、記念撮影のコーナー等をつくりはじめる。

1、2歳児を招待する。各コーナーで案内係や説明をする。
 水族館終了後、円になって振り返る。（本物の水族館運営になりきれよう
 ”会議“と呼んだ）感想や「もっとこうしたら良い所」を出し合い、共有していった。

問題点に気づく「・受付が混雑する。・写真撮影待ちが長い・役割分担をした方が良い
 ・事前に準備できるものは作っておく・カメラマンを増やす・係りをつくる」など

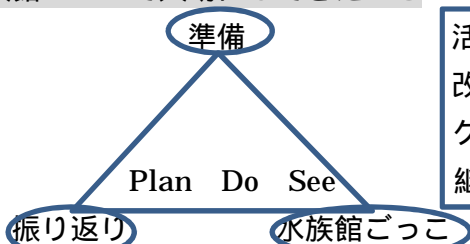
係りの仕事内容を共有するために”朝礼“を行った。（10月）
 子ども達の提案で1～4歳児クラスを順に招待していった。
 どんどん『やってみたい』が増えていく
 ・アシカ、イルカショーをやりたい・工作コーナーをつくりたい・すみだ水族館にみんなで行きたい！

クラスみんなですみだ水族館に取材、見学に行く。（11月）
 全員でイメージが共有され、水族館ごっこがより具体的になった。（水族館に行ったことのない子もいた）
 意見が以前より、活発にできるようになる。
 イメージを実現させるために様々な道具を使い、友だちと協力しながら工夫するようになる。

近所の同じ年長児（本所たから保育園）を招待する。同じ年長としてイメージを共有できたため、
 園内の年少児たちとは違う盛り上がり方をした。（12月）

たから保育園の年長児から、水族館の感想を聞く。・プラス面とマイナス面
 喜びと悔しさを味わう。課題点を改善して、もう一度呼びたい！ 公開保育当日（1月）

* 水族館ごっこで大切にしてきたこと



活動の中で子ども達と振り返り
 改善案を共に考えて共有することで
 クラス全体の協同的な活動として
 継続してきた（5カ月続く）

* 今後の課題 0歳児～5歳児までの発達を見通した保育の実践。（乳児からの主体性の育ち）
 園で大切にしたい事（対話的保育・協同的学び）を保育者全員で確認し、共通認識を持って実践する。

「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」合同発表会 資料

私立 あづま幼稚園 (墨田区文花1-25-7)

☆園の特色

本園は、今年64周年を迎え、卒園生は、すでに6千人を超えました。
教育上の配慮から通園バスを使用せず、朝はお母さんと手をつないで登園。帰りは教職員が引率し、交通ルールを学びながら、楽しく徒歩で降園をしています。

園児が歩いていると、「おかえり！」と声をかけてくださる方、「かわいいわね！」と立ち止まり道を開けてくださる方、そういう近隣の皆さんに見守られていることを感じます。

この小さな子どもたちが、温かい人間関係を育み、地域社会に役立てる人材に成長するようお願いながら、日々保育に励んでいます。

☆保育目標

- ✿自分の思いを言葉や表情で表現できる子
- ✿失敗を恐れずに、いろいろな経験をしようとする子
- ✿相手の気持ちを知らうとし、優しい言葉がけのできる子

☆クラス編制・定員数

クラス	3歳児1クラス	4歳児1クラス	5歳児1クラス	合計
在籍数	35	35	35	105

☆一年の流れ

5月 「いろいろな野菜を食べてみよう！」

食育をきっかけに、うめ組が中心となって、キュウリ・なす・ミニトマトを育てました。毎日水やりをしたり、雑草をとったり、きゅうりに名前をつけて、観察を楽しみました。時には、収穫し、みんなで食べました。

その他に、市販の枝豆、スナップエンドウ、大根、人参、アスパラガスなども昼食時に食べました。

“収穫をして食べる”ことで子ども達が栽培に意欲的になり、成長が速い、はつか大根も植えてみました。

6月 「製作」

育てたはつか大根を観察し、モールや折り紙、お花紙を丸めたり、切ったり、貼ったりして、各自、自由に製作をしました。予想以上に「楽しかった〜」。もっと楽しめるように、廊下に工作の材料コーナーを作ってみました。

9月 「工作ルーム」

廊下から預かり室に工作ルームを移しました。子どもの豊かな発想が生かせるように〜、遊びや製作の活動が連続するように〜、自由な活動空間ができました。保護者から集めた牛乳パック、トイレットペーパーの芯、ペットボトルのキャップ、新聞紙などの廃材をおきました。牛乳パックを繋げたり、箱を切ったりして、色々なものを作っていました。見た目には、簡単に作ったような作品でも、その子の思いは次々と溢れ出し、いろいろな作品ができてきました。

5歳児が、工作ルームに来て、一緒に作る場面もありました。やはり、お兄さんお姉さんたちの作品は工夫があり、ロボット、怪獣、ピストルなどなど、面白い。4歳児も、真剣に覗き込み、アイデアをもらっていました。

10月 「振り付けを考えてみよう！」

この頃の子どもたちは、少しずつ自分の意志を言葉にするようになり、「話し合い」の機会を設ける事にしました。運動会で発表するお遊戯の振り付けの一部を、色グループごとに分かれて考えるのです。お尻を振ったり、回ったり、みんなで考えるのは、楽しかったようです。運動会当日は、張り切って、お遊戯を踊っていました。

また、プロジェクトの始まりに、担任同士が話し合い、子どもとの会話で、なるべく「どうしたらいいかな～」とか「どうしたらいいと思う？」と返事をするように決めていました。まだ、子ども達には変化は表れていませんが、期待を込めて続けてみます。

12月 「どんなお店があるのかな？」の話し合い

作品展の準備が始まり、恒例のお店やさんの展示を、担任が教えるのではなく、子ども主体に変えようかと考えました。悩む前に子どもの反応は～？近くのキラキラ橋商店街へお店見学に行ってきました。魚やさん、わかめやさん、おでんやさん、宝石やさん、仏壇やさん、色々なお店があったよ。

作品展で何のお店を作るかを話し合うと、「お惣菜屋さん」「パン屋さん」「洋服屋さん」「八百屋さん」に決定。保護者に協力を呼びかけ、材料を集めました。お店のデザインやオリジナル商品も考えました！

1月 「一緒に作ろう！」

冬休みが明けて、お店作りが始まりました。子ども達とお店を開く為には何が必要か、話し合いました。看板・レジ・カゴ・値段をつける等、様々な意見が出て、皆で一つずつ作っていくことになりました。金額も子ども達が決めているので、様々です。本や写真をみて真似をしても、立体を作るのは難しい。

「ここを押さえて！」「先生、どうするの？」4歳児には困難も多いです。「じゃあ、一緒につくろう！」と先生も仲間にはいり、「R君はテープはれる？」と声を掛け合う姿が見られるようになりました。洋服屋さんはセロテープで布を接着できず、パン屋さんは、陳列に悩んでいます。子どもたちは、同じ空間で、同じ作業をしながらも、一人一人の楽しみ方、経験の仕方は違うのかもしれない。

2月 「作品展とお店屋さんごっこ」

作品展の後、子どもたちの希望で、年少と年長を招待してお店を開店しました。呼び込みをしたり、レジに案内したり、お金を受け取ったり、パンをトングで取ったり、それぞれに一生懸命販売していました。今でも、工作ルームは全園児の創作の場となっています。

成果

- ・遊びの連続性を可能にするため、工作ルームを設けた。自由に材料を使ったり、年齢を超えた交流の中で、工夫したり、刺激しあう姿が見られた。作りかけの作品を、置いておくことができ、明日への楽しみ・遊びの連続性が生まれた。
- ・実際に見学するとか、話し合うという体験を通して、自発性が育った。4歳児に「話し合う」ことができるのか、不安であったが、成長と共に、自分の意見を皆が聞いてくれること、取り上げて実行することによって、「お店づくり」を全員の力で製作することができた。
- ・今まで困ったことがあると、自分で考えずに「先生、やって～！」「先生、おとしもの～！」と、何でも先生を頼っていた。担任は「どうしようか？」「どうしたらいいと思う？」という言葉かけを増やして、自分で考える機会を作った。今では、子ども同士が声を掛け合い、助け合う姿がみられるようになった。仲の良い友達だけでなく、クラス全体で声を掛け合う姿は、とても微笑ましい。
- ・1年を通した経験の中で、子どもたちから、いろいろな意見が出るようになった。先生と子どもの関係をなるべくフラットにして、担任の意見に反対したり、自ら他クラスとかかわりを持とうと働きかける姿に成長を感じる。

－ アンケートにご協力をお願いします －

1 本日の合同発表会をどのようにお知りになりましたか。

- ① 区のお知らせ ② 区のホームページ ③ チラシ ④ 知人・友人から ⑤ その他（ ）

2 ご感想をお聞かせください。

(1) 4園による取組発表について

- ①たいへんよく理解できた ②よく理解できた ③普通 ④あまり理解できなかった ⑤理解できなかった

(2) パネルディスカッションについて

- ①たいへんよく理解できた ②よく理解できた ③普通 ④あまり理解できなかった ⑤理解できなかった

3 今後、子育て施策に関する講演会やシンポジウムで聞いてみたいテーマ等がありましたらご記入ください。

[]

4 墨田区の子育て施策に関して、ご意見やご要望等がありましたらご記入ください。

[]

※差し支えなければ下記の欄にもご記入をお願いいたします。

■性別⇒（ 女性 ・ 男性 ） ■年齢⇒（ 歳 ）

■お子様がいる場合、お子様の年齢⇒（ 歳、 歳、 歳 ）

■お住まいの町名（例：墨田区吾妻橋）⇒（ ）

いただいたご意見やご要望は、区ホームページ等で公開させていただく場合があります。
また、ご記入いただいた個人情報は、墨田区で管理し、目的以外の用途には使用しません。

ご協力ありがとうございました。